

あなたと私の 極道物語



キャンディやぶこ

りりこ様登場！！

「今日、机ふいたんか？」

「えっ・・・？拭きましたけど・・・」

フン・・・

鼻息も荒い

ワンマン社長。

何が気にいらないのか、

とにかく朝は機嫌が悪く、

どこかイチャモンつけないと気が済まない。

私はジミ～を装ってる事務員。

でも、心の中は

さまざまな欲望が渦巻いている。

ここではおとなしくしてないと

何かと面倒だから、

昼間働いているときは化粧もせず、

メガネをかけて

虫も殺さぬ顔をして

夕方までの時間をやり過ごす。

でも、定時の5時になれば猛ダッシュ。

家とは反対方向の電車に乗っておでかけ。

どこへいくか・・・って？

それは・・・あなた・・・

ほにやららですよ。。

おっと、その前に。

バチッと

メイクを固めないと。

最近はコスメコーナーの一角で

お化粧品コーナーが設けられていて、

どのお化粧品も使い放題。

おねえさんが優しくアドバイスしてくれたり、

髪の毛までまきまきロールのサービスしてくれたり。

あんまり毎日無料で借りてると

悪いから、

結構コスメグッズも

お買い上げ。

そうして、夜の街へ繰り出す

リリコ様なのだった！！



セクハラもあしらって

終電には間に合うように乗る。
これは、私が唯一自分に課した掟。

そうしないとズルズルと
闇の世界に落ちていきそうだから。。

それに、昼間の仕事に差しさわりがあっては
いけないのだ。

実家の母は
私を品行方正な娘だと信じている。
だから私はその期待にこたえるよう、
世をしのぶ仮の姿で
こんなジミな
そしてうさんくさい怪しい会社で
働いているのだ。
でも、いつまでも
こんな生活を続けているつもりはない。



翌朝。

「花もってきたで～」
調子っぱずれの声色で
社長がはいつてきた。

私は花なんてまるで興味がないのだが、
「入口に花くらい飾らんと～」と

社長が似合わない花束を時折持ってくる。

家の畑に咲いているのを
切って持ってくるのである。

私は花瓶のしおれた花を処分し、
新しい花を挿して飾る。

従業員の一入である
ヨースケが入ってきた。
「あ、りりこちゃん。おはようございます。
花なんか飾って～
昨日は彼氏と・・・よかったんか？」

は？
「それって充分セクハラですよ！」

「まーまー・・・」
「手帳に今日の日付と名前、言葉を記入しておきます」

社長はじめガラの悪い
奴らとも
つきあって適当にあしらっていかねばならない。

日曜日の昼間はいつも
本命彼氏とデート。

昼間に
お弁当もってピクニックにいたり、
テーマパークに行ったり。
結構健康的。

でも、たまに昼間っから
ラブホにも行く。

私はうまれてこのかた、
物心ついてから
オトコが途切れたことがない。

いつもいつも
どこか重なってる。
別に二股かけようとか思ってないけど、
重なってしまうんだもん。仕方ないよね。

でも、こうゆうの
今でいうモテキっていうのかな。

だとしたら
私のモテキ結構長いよ。

そんなに花の命は長くないだろうから、
こんな浮かれたことはいつまでもやってちゃいけない、って
たまに自分で戒めるんだけど。



朝出勤する。

「リリちゃん、コーシーいれて」
61歳の社長が言う。
そうなのだ、
60過ぎた男の人って
なぜだか
「ひ」がキチンと
発声できないのだ。
だから
コーヒーと自分で言ってるつもりが
「コーシー」になり、
カラオケで
「奥飛驒慕情」を歌うと
♪あ～ああ～おくーしだーの・・・
となり、
商品は「しょうしん」となる。
決してふざけて言ったり、歌ったりしているわけではない。

そんなコーシーを飲んでいる社長。
「今日のはちょっと苦いな」とか
「もうちょっと砂糖いれてくれ」だの
うるさい。
お酒も飲むのに甘党なのだ。

「やっぱりコーシーはネスカフェやな」

といつも言う。
ネスカフェしか知らないくせに。と
思っていたが、今日は
どこで仕入れてきたネタか、
「バリスタ」っておいしいんやろうか。
今度買って来てみてくれ。
会社の経費で。という。

私って罪な女？

5時きっかりに
今日も会社を出る。

私はどんなことがあっても
残業はしない主義。

今日は2番手の男子とおデートなのだ。

二股かけてるのかって？・・・
いや、私としてはあくまで
本命の蓮が命なんだけど、
実は蓮はホストクラブで
働いているので平日の夜は会えないのである。

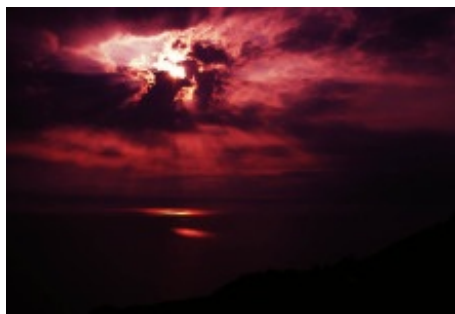
そのさみしさを埋めるために・・・といえば
ただのいいわけなんだけど
いや、押し切られた時も
私には彼氏がいる、って
ちゃんと伝えたんだよ。

でも、それでもいいからつきあってほしい、ていわれたんだ。
だから平日の夜限定。それも
私の夜のバイトや習い事がない日だから
週に1回くらいかな。

2番手の悠真（ゆうま）とつきあってることは
もちろん蓮には内緒。
そんなことがばれたら・・・

でも、罪悪感感じながらも
悠真との
関係が心地いいものになりつつある。

体の関係も。。



感じたら蓮に悪いような気がしてたけど、
やっぱそうゆうことって
無理ってことが
わかった。
でも別に自分のこと
淫乱だとか、
そんな風には思わないけど。

たこやきラブ

翌朝。

「コーシーいれてや。リリちゃん」

いつもの調子でワンマン社長。

しかし今日は機嫌悪いのか、

「今日のは、なんかおいしくないな～
むかひの喫茶店で飲み直してこーかなー」

などと

コ憎たらしいことをいう。

どうぞ、どうぞ。

社長がいなくても

のんびりしてるけど、

いなけりゃいないで

より一層のんびりできるわ。

社長はいそいそと

イマドキこんな「ザ・喫茶店」もないだろう、と

思われる昭和の面影そのまんまの、

「純喫茶・ボン」へでかけた。

残る敵は一人。

まだいたのだ。

社長の自称・片腕。

がまごおりさん。

しかしこの人は午前中は延々と

ソリティアを楽しんでいる。

これだけゲームがあふれてる時代に

ソリティアって・・・

いやいやそういう問題じゃない。

なのに、がまごおり氏。

「これ、なかなか頭の体操なるんやで」などと
ぼざいている。

お昼になった。

「りりちゃん。昼、外に食べに行くけど
帰りにたこやきこうてきたるか？」

がまごおりさん。

なかなか良いところもある。

「あ、タコ八？こうてきて～」

私はたこやきにはうるさい女である。

なにしろ、

私は実は夜のバイトというのは
繁華街の屋台のたこ焼き屋を手伝っているのである。

大阪の家には必ず一家に一台、

たこ焼き器があり、

私は小さいころから

自然にたこ焼きを焼く技術を習得してきた。

今や家で焼く時も

自分なりに研究した

だしの配分からこだわっている。

たこ八のたこ焼きが届いた。



外はカリッ、中はとろっ。・・・が
理想だけど

結構難しいんだよね。

ま、たこ八のゆるゆるたこやきも

これはこれでよい。

はふはふ言いながら食べる。

昼にたこやき、

夜はたこ焼き屋で

バイト。

もうタコになりそう。

でも今日も5時きっかりに会社を出、

たこ焼き屋へいそぐ。

ここでは

私の顔で買ってくれるお客さんも多い。

結構人気者なのだ。

それに、屋台の商売は

チト危ないだけあって

時給もよい。

その危ない思いして稼いだお金を何に使うかって

いうと

私には夢があるのだ。

いつまでも、

あんなヤクザな会社では働くつもりはないのである。

恋するりりこ

平日に蓮と会えないのは本当にさみしい。

たこ焼きのバイトくらいでは、ごまかせない。
やっぱり心にすきま風が吹いたりする。

私が蓮を好きなのは

ただ見た目のカッコよさだけではない。

「私の話をじっくり聞いてくれる」ところ。

これはもう、モテる男の第一条件といってもいい。

この蓮の特性といってもいい資質は持って生まれたものなのか、
ホストという職業柄、
培われたものなのか、
どちらかはわからないが。

私は19歳のときに

32歳の男性とつきあっていたことがある。

その人はやたら説教好きで

私が若かったということもあったのか、

「キミのそうゆうところがいけないよ」

「その考え間違ってるね」

といちいちダメだしをして否定された。

でも、その方自身のことはとても好きだったし、

まだ私もピュアだったので、

言われた通りなるべく改善してがんばろう、と

努力しようとしたんだけど

力尽きた。

でも蓮は私の全てを受け入れてくれる。

私の話すいろんなことを

一言一言、

絶対聞き洩らしたりせず
キッチリ聞いてくれる。

それが心地いいんだな～・・・

私も部屋に一人でいると
さみしくなって。

夜中に電話やメールしたくなる。でも、
仕事中だろうな・・・ておもうと
つついためらってしまう。

なので、たまに非番の時に会える
平日の夜。

その日だけは

私、パーティーのような気分になる。

部屋に折り紙でつくった

輪っかの飾り物をぶら下げたい気分になる。



2番手の男とは別れなくちゃね

でも、私ったらこんなに蓮のこと好きなのに
どうして
2番手の悠真と寝ちゃったんだろ・・・
普通本当に好きな人がいるときって
女というのは他の男とはつきあえないらしいのに、
なんでだろ？

私は自分で自分がわからない。
そんなにさみしかったのか。
さみしさを紛らわせるためだけに・・・？

今後悠真とは、もうつきあわないでおこう。
そう決心した。



翌朝。

「りりちゃん～頭痛いねん～

バッファロンこうてきてくれへんか？
それと、胃薬も。
こないだの新四今日胃腸薬。もひとつやったさかい・・・
なんか新しいの頼むわ。ええのん、みつくろって・・・
それと・・・風邪薬もやで～・・・ララにしようかな。
まあ、なんでもええわ。
経費でおとすさかいな。ちゃんと領収書もろてきてや」

会社の常備薬にしては、
飲んでるのはほぼ社長一人。
ほとんど誰も使わない。

「社長～自分勝手にそんな3種類もの市販の薬、
飲んだらあかんで」

私はついつい普段は抑えてる大阪弁が出た。
本音をしゃべるときや、ちょっと興奮すると大阪弁が出てしまうのだ。

「かめへん、かめへん。
ず～っと何十年もそないして飲んできとんねん」

いつまでも社長の相手ばかりしてられないし、
気晴らしもあって、
徒歩5分の
ヒバリ薬局まで行った。
ここも年季の入った店構えである。

しかも、月に2, 3回はここで
何かしら購入してるというのに、
お店のおばさん・・・といっっては失礼だが
オーナーさんというのも大げさな、
一人経営の店なので
こうゆうときなんていうんだろ？
店主さん。でいっか。

どう見ても30代半ばくらいなかんじなのに、
何度私がい物しても
初めての客のように扱う。
距離を置いているのとは違う。
客と親しくならないようにする必要が商売しててどこにあるのだ。
いや、どう判断しても
私の顔と会社名を覚えられない様子なのだ。
いや、どこか足りない、抜けているというのとも違う。
覚える気がない、というのか
商売っけがない、というのともまた違う。
なんというのか、
一人店主さんで自分の店なのに、まるでバイトのような感覚というのが一番近いだろうか。

毎回毎回

私が「領収書お願いします」というと
「お名前は？」と聞いてくる。
そのたびに「極細株式会社で」と告げると
「えっ・・・？極道？」と
これまたお決まりのやり取り。
「いえ・・・ゴク・・・ぼそ・・・です」
と私は一言一言かみしめるように発音する。

世話のやける社長

「あ〜極細、極細ね」わかったのか、どうか
店主さんは
領収書に会社名を書いてくれた。

いまどき、どこでも感熱紙でレシートが領収書がわりになるよう
になってるところが

多いのに、

いまだに

このヒバリ薬局では青色文字のレシートなのである。

しかも、金額だけで商品名がでていない。

領収書も金額だけだから

事務所に戻ったら

さっさと会計処理しないことには

日数がたつと

「これ、何を買ったんだっけ？」と記憶の糸をたどらなければならない。



会社に戻り、社長のためにコーヒーを入れる。

「砂糖多めやで」

そのコーヒーを半分ほど残しておき、

ほどよくさめたところで

3種類の薬を同時に、そのコーヒーで流し込む。

「プハーッ！あ〜これでなおった、なおった」

薬を飲んだと同時に即症状が改善されたと思い込むめでたい社長。

「ちょっと寝るで」

今度は昼寝である。

ソファーに横になり

ほどなくいびきまで聞こえてくる。

今日は3時に仕入れ先メーカーである

「どんだん商事」が来る予定である。

その30分前には起こして、

寝ぼけまなこをすっきりさせ、

そのためにはまたコーヒーを入れることになると思うが、

彼曰く、「目覚めのコーシー」を

飲まさなければならない。

あ～本当に世話のやける社長である。

寝起きのコーヒー

「社長、もう2時ですよ。起きないと『どんだん商事』さん、こられますよ」

「ん・ん・ん・うん・ん」と

想像通りの反応。

バケツ一杯の熱いコーヒーでも

頭からぶっかけてやろうか。

ようやくおもむろに起き上がり

目をこすりはじめた。

「あーほんま、えらいコワイ夢見たで〜。

ビルに飛行機突っ込んでくる夢や」

「は？ここはビルでも高層階でもありませんけど」

ただの、平屋の事務所である。

しかも、近所の暴走族が

バイクで突っ込んでくる可能性だってないくらいの田舎である。

「はあ〜えらい目おうたわ」

まだ言ってる・夢なのに・

私はもうコトバを返す気もなく、

またコーヒーを入れ始めた。

「おっ、えーにおいやん。

さすが、りりちゃんやな〜

ワシが起きたら

バシッ！とそっこーで

コーヒーいれてくれるなんて、よーいきくわ」

私は社長が

「速攻」という言葉を会話の中に盛り込んできたのと、

「コーヒー」がキチンと発音できたことに

驚いた。



あたり前田のクラッカー

「寝起きやさかいな。ちょーっと心持ち、ブラック気味でもええで」

「でも、ミルクと砂糖は入れるんでしょ」

「あったりまえやがな～

ミルクと砂糖いれなんたら、コーヒーちゃうがな。

あたり前田のクラッカー」

私はミルクと砂糖を入れたら、すでにブラックではないことと

あたり前田のクラッカーという

今や存在しているかどうかも

不明なお菓子の商品名のギャグにあとずさりした。



湯気のとつコーヒーを社長のところにもっていく。

「おーほんま、ほくほくしておいしそうやんけー」

社長はコーヒーカップを包み込むようにして

大事そうに中の液体をのぞきこんだ。

「ほくほくって、言葉の使い方

間違ってますん？」

「焼き芋やないねんから」

間違ってますん？」

「焼き芋やないねんから」

また、私は大阪弁がでてしまった。

「なんか、なんぞ甘いもんでもないか。

まんじゅうとか・・・」

私の言葉には全く

構わず、社長街道を

ひたすら突っ走る。

「どんどん商事、くる途中に
くるみ餅でもこうてきてくれへんかな～」

「商談こられるのに、そんなてみやげなんて
買ってもってこられませんよ」

「電話しよかなー」

呆れる私。

気がついたら

電話をかけている。

「いやーこうて、もってきてくれるらしいわー。」

ニコニコ顔の社長。

「まー商談やゆーても、

肝心の話はものの3分や。

8割5分は世間話やよってな。その商談がうまくいくか否かは
甘いもんが決めるんや」

独自のハチャメチャな商談理論を展開する

おやじであった。

🍡やぶこの今日のひとこと・・・

あたり前田のクラッカー、アマゾンで本当に
売られていました。ビックリ！！🍡

いらちってご存知？

「いや～おおきに、おおきに～」
『どんどん商事』さんが
ベージュの不織布に包まれた
くるみ餅を差し出すと、社長は満面の笑みを浮かべた。

「リリちゃん。コーシーおねがいやで。ふたつ。
あ、
ひぐつつあんはブラックやったでな」と
どんどん商事の担当、樋口さんに聞いている。

大阪では、その名字によって
最後の一文字をかつとばす手法を往々にして用いる。
やまもっさん(山本さん)
いわはっさん(岩橋さん) などである。

これは、相手への親愛の度を高めるためと
単に大阪人が「いらち」なだけという説もある。

いらちというのは
一般的な言葉の同義語としては、
せっかちが思い出されるが
少し違う。
すぐいらいらする。イラつく。短気。
などといらちの定義が憶測されているが
私はそのどれもが違うと思う。

いらちは場面ごとの細かい設定でとりおこなわれる。

たとえば、人を待つのに
5分も待てない。
家に客がこられるときには
何回も玄関を出たり入ったりする。

出かけるときに予定より早くでかけようとし、
準備の遅いものにたいして

「いらちくる」などとほざく。

・ ・ と書くと

時間厳守にキビシイ人なのか？という

疑問がわきあがり、それはそれで長所なのではないか。

ということになる。

いやしかし、自分は待てないくせに、

待ち合わせには遅れる。

その時は決して悪びれず、

「いやーすまん、すまん」と

こともなげにいうのが、

このイラチ人種の特徴である。



↑ 堺名物「かん袋」のくるみ餅。ご存知ですか？

脱線して線路から落ちたよ

そして、この人種のさらなる領域は
食べ物編でも大いに威力を発揮する。
飴玉をなめていられず、
すぐにバリバリと音をたてて食べ始める。

味のなくなったガムを1枚だけ
延々と噛み続けることができず、
味のなくならないうちに
もう1枚、もう1枚・・・と投入し
おだんごのようになったガムをくちやくちやくと噛む。

いらちの話からずいぶん話が脱線してしまったが、
名字の最後を発音せずに
小さい「ッ」をいれるという話に戻ります。

モリグチさんをもりぐつつあん。
はしもとさんをはしもっさん。
などとアレンジする趣向がいらちの特質のひとつであるという話。

しかしこれは
大阪人気質ともいえるので
そうなると
いらち＝大阪人ともいえる。

話が脱線につぐ脱線をつ
おこして
いるうち、
社長もひぐつつあんも
すっかりコーヒーを飲みほし、
くるみ餅も完食してしまった。

「いやーほんま、うまかったわ。
くるみ餅。おおきに、ひぐつつあん。」
社長はずいぶん満足そうだ。



りりこの夢は夜ひらく

「ところで今度の納品やけどな」
やっと本題に入ったようだ。

しかし、社長の宣言通り、
「商談」と名のつく世間話もどきは
あっというまにもものの3分で終了した。

この『極細株式会社』は小さな食品卸の会社であり、

近辺の小売店やミニスーパーなどに
食品を細々と卸している。
創業者である社長が細く長く愛されるようにと
「極細」と名付けたようだが、
文字通り商売も先細りで
最近「極太」にしとけばよかた、
などつつぶやいている。

仕事が終わりに、今日も一目散に
退社し、家とは反対方向の電車に乗る。

今日はたこ焼き屋のバイトではない。
私は週2回、火曜と金曜は
行政書士の講座に通っているのだ。
仕事の時は、
ただのばさばさストレート。
しかし、夜からは、
まきまきロングに大変身。

講座の時だって、
女を休んだりしないのだ。
しっかりいつものように
コスメショップのメイクコーナーに
立ち寄って
メイクをし、アイロンまで貸してもらうのだ。

アボカド好きな女

ちょっと腹ごしらえで「SUBWAY」へ寄る。
エビアボカドにするか、
アボカドベジーにするか。
究極の2拓。
女の子ってホントにアボカド好きが多い。
ろばたに行けば、
アボカドサラダ。
回転寿司に行っても
アボカド巻き。

そういえば早口言葉もよく練習したな～

アボカドアボカドミアボカド
ヨアボカドゴアボカド
あわせてアボカドムアボカド。

かえるびよこびよこの変型だけど。

アボカドなのか、アボガドなのか。
それによって変わってくるから、
コトバが混在しないよう
統一させるため、
どちらが正しいのか
調べたりした。

ちなみに正解はアボカドらしいよ、皆さま。

また例のごとく
脱線しましたが
結局アボカドベジーに決定した。

パンはベストなハニーオーツ。




← 少し小さいですが、左端です。

サブウェイって
野菜が多くてほんとおいしい。

それになんといっても
アボカドとワサビ醤油の

融合性がまたよい。

 今日のやぶこの一言・・・
 ・社長から怒られそう・・・
 アンタこの話、恋愛ものって
 ゆーとったんちゃうん～
 いい加減脱線しすぎやで～
 底抜け脱線ゲームちゃうで～！ ←これ
 わかる方、かなりな年齢のお方です。私も。

おいしい腹ごしらえを終え、
すっかり気分良くなった私は教室へと足を運ぶ。

教室は10人前後の少数制。
どうしても都合悪くなれば
その週の他の時間や曜日に振り替えることもできるので
多少メンバーは入れ替わることもあるが、たいてい同じ顔ぶれ。

年齢は様々で同年代から中高年層の方々まで、
男女ともいらっしゃる

。
そのなかで同年代の浩輝（ヒロキ）と
仲良くなった。
といっても、私には本命の彼氏がいるのだから、
そんなうわついた考えはみじんもなく
なんといっても
ここには勉強にきているのだから。

講座が終わって家に戻ると
携帯の着信があった。

蓮からだった。
「お店早めにあがったから会わないか？」

そして私たちは行きつけのバーで落ち合った。

蓮と一緒にいるとみんなが振り返る。

やっぱりホストという職業柄
どうしても目立つ風貌に、
長身の彼。
華があるというのか、どこか
人を惹きつけるところがある。
そんな得体のしれない魅力に私もとりつかれてしまったのだけど。

でも蓮もいつまでも

この仕事が出来るとは思っていない。

ホストという仕事は命が短いし、
自分へのメンテナンスも大事で投資する面が多い。
蓮も将来の夢はもっていて、
私たちはそれにむかって
一緒にがんばろう、って
約束してるのだ。



とてもチャラチャラした二人で
そんなことを考えてるようには
見えないだろうけど。

明日仕事だからさっさと帰るって本当？

バーで飲んだだけで

あっさりバイバイした

私たち。

なんて清く正しいお付き合いなんでしょ？

いや、本当は

軽く手はつないだけどね。

えっ？それだけ、って・・・？

いや、本当は軽くキスはしたけどね。

えっ？それだけ、って・・・？

いや、本当は

ディープな口づけだったけどね。

えっ？どこで、って・・・？

そそ、それは・・・

裏通りをちょっと入った

路地裏の人目があまりないところ。

・・・それだけ・・・？

うん・・・それだけ・・・

違うでしょ。

あ～ちょっとね・・・
服の上から・・・

それで・・・？

酔っ払いが通ったからさ・・・

あ～そうゆうのって
やっぱ恥ずかしいほう？

そうだよお～恥ずかしくなさそうに
見えるけど
結構シャイなりりこ様だよ。

でも、蓮と歩いてるとメチャ自慢でしょ。

うん、それはね～

なんか、不安とか心配とかない・・・？

ないね。

そうかな～・・・

私、人生でたった一人、
「なんでアンタみたいなのが
あんなオトコマエな人と付き合えるの？」て
いわれたことあって、
その時本当～に心配で心配で・・・

オトコマエってなに・・・？
なにが前にあるの？

あ～今オトコマエって言葉、
死語なんだよね。
イケメンだよ、イケメン。
ちょっと違うけど。

どれくらい違うの、
イケメンとオトコマエって。

うう～ん・・・オトコマエがホテルの最上階で食べる
特上のサーロインステーキならば、
イケメンは築地市場のまぐろ丼かな～

え～じゃあ、イケメンって庶民派じゃん～

そうだよ、手が届く範囲。
オトコマエは手が届かないんだよ。

そんな手の届かない人と
つきあってたことあるの。

だから、過去なんだったば。



今日のやぶこのひとこと・・・りりこは途中からいったい
誰と会話してたのでしょうか・・・？

ストロベリーな夜

ひんやりした一人の部屋に戻る。

やっぱりなんとなあ〜く一人はさみしいな〜・・・

でも、そんなこと言ってもらえない、
さっさと寝よう・・・

携帯の着信あり。

悠真からだった。

あ〜そうそう。。。。

このお方とは別れなくては。

どうやって別れるか？

結構男のほうか未練がましいんだよね、

別れるときに苦労する。

とりあえず、

携帯はスルーして寝ようとする
とまた着信。

どうせ、悠真だろ・・・

と気の進まない気持ちで携帯見ると
蓮だった。

あわてて出る。

「もしもし・・・リリコ？」

「うん・・・」

「今日はあんまりゆっくりできなくてさ」

「うん・・・でもストロベリーダイキリおいしかったよ。

フローズン。」

「俺の店のほうがうまいぜ」

「そうだね。きっと。今度、蓮のお店行くよ」

「こなくていいよ」

さえぎるように言われて
ちょっとびくついた。



「なんで・・・？」
「なんで・・・て・・・」
「リリコはこないほうがいいからさ」

ふう～ん・・・
まっ・・・深く考えずに、
いい風に考えとこ。

「じゃ・・・おやすみ・・・」
明日、また大阪弁バリバリの
社長と付き合わないといけないから
エネルギーたくわえとかないといけないから
余計なこと考えず寝よう。

ちょっと気持ち、もやもやするけど。

ミンミン餃子おいしいね

「実際やな～仕事ゆーんは、みな段取りやねん。
段取りさえでけた一ੱたら、
あとはどないなとなんねや」

「ほお～そうですか」

朝っぱらから
また社長の独壇場が始まった。
しばらく付き合わないといけないことは必至だ。
腹をくくる私。

「せやで、こないだかてみてみい。
ヨースケや。」
社長は得意げである。
入社1年目の
少年院上がりのヨースケである。

「ヒナギク堂に納品にいかなあかんのにやな。
前の日から準備せんと、翌朝なってから
あわてて準備するもんやさかい、
肝心の伝票もってでるの忘れとんねん。
もう～話ならんで」

「あ～なんか、戻ってきてましたね」
「せやろ、
忘れたから取りに戻る。
そら、しゃーないわ。
せやけど、それでえーんか、ちゅ一話や。
仕事ゆーもんは、そんなもんやない。
忘れモン取りに戻ってる間も
刻々と時間は過ぎていっても一てんねん。
無駄な時間や。
そのあと全てが後手後手になる、ちゅーんや。
先方にも
遅れてすいません、いわんならん。
あーあんたまたかいな。いわれる。」

ヒナギク堂やからえーようなもんやで、
せやけど
また信用うしのうてるわ。(注・失ってる、の意)
仕事ゆーんは
信用ゆーんがいっちゃん大事やねん」

さっき、段取りが一番大事や・・・て
おっしゃいませんでしたっけ？

突っ込みたくなかったが
ここでそんな言葉を吐いたら最後。
必死で飲み込みスルーする。

「ほんで、ヨースケもやな、
ワシから一時間説教くらわなあかん。
まあ、ワシやからええようなもんやで」

ワシやからええ、って
そのワシと言う人が
世の中で一番厄介な人だと思いますけど・・・？
と
ここでも私はまた言葉を飲み込んだ。

もう、超特大アメをふたつ一気に飲み込んだ気分で
若干
のどがつまって気分が悪い。

「ほんまに
テンション下がってミンミン餃子やで」

「はあ？」

どうやらMAXの逆であるMINを
ミンミンギョーザとかけあわせた
新種発明のギャグのようである。
新しいのか古いのかさえも判定不能である。

社長は「どや」といわんばかりの
得意顔である。
結局これがいいかったのでは。
おやじギャグの発掘には日々切磋琢磨して
腕を磨いているつもりのようだ。



別れは血の味

今日はまたたこ焼き屋台でのバイト。

オーナーさんが
時給200円あげてくれるそう。

たかがたこ焼き屋といっても
実はぼろい商売で
なんとバイトの私に時給1800円！！

ちょっと闇がかってるからかしら。。

でも、くるくる巻き毛をなびかせて
くるくるたこ焼き焼いてると
結構評判よくなって
私目当てにたこ焼き買いに来てくれる常連さんもいる。

「たこやき1舟」
「はいよ～！ソース？しょうゆ？」
威勢のいい営業作り笑いで反射的に返すと
「たこやきにしょうゆは邪道でしょ」

聞きなれた声が聞こえてきた。

悠真だ。

「げっ・・・！よっくわかったね～？・・・ここ」

悠真にはたこ焼き屋でバイトしてることは
チラとしゃべってしまってたけど、
場所までは伝えてなかった。
まさに、これってストーカーじゃん！！

しかし、商売商売仕事中。
こんなところで、感情だしちゃ～いけない。

「あ～ソースにマヨネーズは？つける？」
と聞くと

「マヨネーズも邪道でしょ」

と返された。

「おっ、お客さん。ツウだね～！！」

しかし、そんな言葉には、にこりともせず、

お金だけ払ってたこ焼きを受け取る悠真。

ずっと携帯にも出ず、拒否ってたから

怒ってんのかな。

自然消滅は、やっぱ無理か。

キチンと別れを告げねば。

仕方ないので

口の動きだけで

「あーとーで」と伝えた。

なんだかそれだけでうれしそうな悠真。

オトコって

本当に単純。

深夜のファミレス。

「あのさ・・・私、前も言ったけど・・・

彼氏いるから・・・もともと・・・

だから・・・やっぱり悠真とはつきあえないよ」

そうはっきり話した。

「うん・・・。でもさ・・・たまに会ってくれるだけでいいんだ」

「ダメだよ・・・やっぱ・・・そうゆうことできない、って

わかったんだ」

なんだか捨てられた子犬みたいな目で

上目づかいに

見てくる悠真。

ここで情にほだされてはダメ。

店を出て少し歩くと、
深夜の路上で
お花が売られていた。

「こんな夜中にこんなところで
お花なんか売ってるんだね〜・・・
てか、買う人いるんだ」

いきなり悠真が走って行って
お店に売られてるだけのバラの花を
全部買って両手に抱えて戻ってきた。

「はい！プレゼント。
最後のプレゼント」

やるね〜、悠真。
なかなかかっこいいじゃん。

バラのトゲがほっぺにささって
一筋赤い血が流れてきた。



その血を指でぬぐって
悠真のほっぺに
つけてやった。

今日も社長のウンチクパワー全開

「仕事ゆーんは、結果が全てやねん。
上の人はもちろん、周囲の経過を見てるであろう人々も
結局結果だけで判断してる。
そうせざるをえん、ちゅーことや」

はぁ～また朝っぱらから社長の
仕事哲学に関するウンチクをきかされるのか・・・
「残業するんは、えーで。
せやけど、残業すること自体はそないほめられたもんやない」

じゃ～残業しないアタシ。えらいんじゃ？

ちょっと浮かれたつ気分の私。

「人の集中力ちゅーもんは、
実際のところ10分くらいしかもたへんのや。
せやから残業2時間したところで、
本当に集中して
しっかり仕事でけたな。という成果が得られるのは
最初の10分間にした仕事だけ。
あとは残業代泥棒みたいなもんやな。」

「でも、残業代は申請せず、自ら残業をせざるを得ない場合もありますよ」

「そこやねん！
残業代申請せーへん奥ゆかしい実に勤勉な日本人の鏡みたいな
人間、自己陶醉型やねん。
自分が仕事したんやから申請したらえーねん。
管理職以外は」

「さっき社長がおっしゃったような
うす～い内容の仕事の結果としても・・・ですか？」
「薄いかどうか・・・はこれまた
自分が判断するんちゃうんや。
仕事ゆーもんは、でけてもでけなんでも
自分が判断するんちゃう。周りがきめるんや」

「は〜・・・」

「ほんでやな、あえていわせてもらうならば、

ワシからしたら

夜残業するんやったら

朝はようきて朝仕事するほうがよっぽどええ、ちゅーことや」

「朝・・・ですか？・・・でも、朝早くくるのはキツイですよ・・・

それに、

やり残した仕事がある、とおもったら

家に帰っても気になって気になって眠れないじゃないですか」

「せやねん！よーゆーた！残業もしたことないりりこはんが
ようそこまでゆうたな。えらいで〜」

私は妙なほめられ方をした。

喜んでいいのか嘆くべきなのか、どちらとも判断つきかねるが
まあどちらでもよい。

「仕事ゆーもんはな。はっきりゆーて
一生終わらんもんや。終わらないねん。

どこまでいっても。

残業ゆーてもどこまでするんや、ちゅー話や。

もう一日8時間やそこら働いてきて、

すでに脳の働きわるうなってるそこへ、さらに残業しても

効率悪いだけや」

「だから残業しないほうがいい、ってことですね！」

「いや、8割はせなあかんねん。なんぼなんでも」

「はあ・・・」

「ほんで、家に帰ったらスパッ！！と仕事のことはきれいさっぱり忘れる。

よう家帰ってもあれや〜これや〜

・・・といつまでも仕事のこと考えてる人おるやろ。あれあかんねん。」

「そうですね・・・家で仕事のこと考えても結局家で何も仕事できませんもんね」

「せや！！」

社長の目がランランと輝きはじめた。

「ちょっとノド乾いたさかい、コーヒー一口飲むわ」

ずずず〜とコーヒーを飲みほす。

「家帰ったらやな。アロマ焚いて瞑想するんや」

ええっ・・・？！

アロマ？瞑想？！

社長の口からとても似合わない、

信じられない言葉が

飛び出してきた。

そんなこと社長してはるんですか？

「家帰ったらとにかくリラックスや。そして

その分はよう寝て、はよう起きる。そしてはよう会社に来る。

これがワシの長年培ってきた

経営哲学や。」

はあ～・・・そうですか。そうやって

極道・・・いや極細株式会社を

細々と・・・しかし地道に経営されてきたんですね。

とりあえず、

そうもちあげておいた。

しかし私はこの会社にはそういつまでもいないぞ、

改めて決心を固くした。



蓮のカミングアウト

「りりこ。お前、他の男と寝ただろ」
ベッドのあと、唐突に蓮が言う。

「えっ・・・？」

思わず聞き返したが蓮はただ天井を見つめてる。

「いや・・・て・・・ないよ・・・」
とぎれとぎれに
ごまかしながらそういうのが
精一杯である。

蓮は目だけ左下に動かして
私を一瞬見た。

「し・・・た・・・だ・・・ろ」

確信こめてそう言う。」

なんで。何で何で何で。
なんでわかるの。
どこでわかるの。そうゆうことがそうゆうことでわかっちゃうの。

私は後悔と疑問とさみしさと怖さの波に押し寄せられ
すっぽり包み込まれ飲み込まれた。

「あのな。違うんだよ！」
初めて見る蓮の顔。

何が違うの。どう違うの。
泣きそうになってきた。

そうだ、確かにあの時。。

蓮となかなか会えんくて

そのとき言いよってきた
悠真と。

でも、私が本当に好きなのは蓮だから。

もう別れたし。

と私は自分で自分を正当化しようとした。

「あのさ・・・よく聞いてよ。

俺は・・・リリこのこと、本当に大事に思ってる。

だから、もう絶対そうゆうことやめろよ。

何があっても」

「うん・・・わかった・・・」

「俺も、この仕事してるのもいつまでも

出来ると思ってない。でも、

将来夢があるからそのために金ためてる。

だからそれにリリコも一緒についてきてほしい」

何、蓮の夢って。

前もそんなこと聞いたことあったけど、詳しくは教えてくれなかった。

私も夢があるんだよ。

だからこんな切れた脳細胞にむち打って、

学校に通ってる。

ちょっと無理っぽいけど。

「蓮の夢・・・て・・・何？」

「俺さ・・・今まで話したことなかったけど。。

児セン出身なんだ」

「ジセン？ジセンって何？」

「あ～・・・施設。」

「・・・えっ・・・そうなの・・・」

ちょっとビックリした、

かなりビックリした。

で、将来自分が子どもたちを預かる
スイートホームを
作りたいって思ってるんだ。



モツ鍋食べる女

仕事が終わリ

今日は

行政書士講座に行く日。

その前に・・・お腹がすいた私は
ひとりモツ鍋をつついてる。

そうそう・・・

ここで

蓮と知り合ったんだよね～

あの時も私一人でモツ鍋食べてた。

「一人？」

こんな小汚いカウンターだけのお店には

およそ似つかわしくないイケメンの

男が話しかけてきた。

ナンパ？

ま、りりこさまにはよくあることなんだけど。

それでも

こんなシチュエーションはなかなかはじめての出来事であった。

そしてその後二人並んでモツ鍋食べて

熱燗まで飲んだ。



あの時も講座行くときだったから、
軽く酔っ払いモードで勉強した。
でも私、きっと
亀梨くん似だったことに
一目ぼれしちゃったんだよね。

でも、蓮のほうは
一人でモツ鍋食べてる女なんて
ずいぶん変わってんな。
なんてゆう
ただの興味本位だったみたいだけど。

でも、そんな蓮が昨日、
出生の秘密まで
暴露してくれて、
そして将来の夢まで語ってくれた。

自分も同じような子どもたちを支えられる
役目がしたいといって
子どもたちを預かる施設を作りたいなんて。
もうそのスイートホームの名前まで考えてた。
ハッピーウィングだって。

私もその夢と一緒に支えたい。。

なんだか一人でぼわんとしていると

「ひとり？」

突然話しかけられた。

同じ講座で一緒の

浩輝（ヒロキ）だった。

「またナンパかと思ったよ～」

「また・・・って？」

浩輝はあたりまえのように隣に座った。

「あ、いえいえ・・・こっちの話」

今は過去の蓄積？

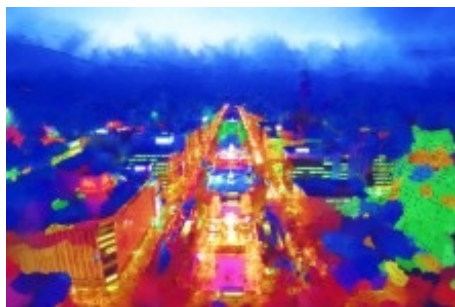
講座が終わって浩輝が話しかけてきた
メルアド教えて・・・って・・・
やっぱり・・・って
感じだったけど、まっ、いっか。
メルアドくらい。
と
教えてしまった。

「今度家に行くよ」
というので
「ダメだよ～うちは女人禁制だから」
とガッチリあしらった。

絶対に自宅に蓮以外の
オトコはいれない。

これだけは、
私が自分で自分に課した鉄則なのだ。

明日もまた仕事だし、
「じゃあね～また次回！！」と
駅で浩輝とバイバイした。



翌朝・・・
出社すると
またもや社長のありがた～いご訓示が
はじまろうとしていた。

朝のコーヒーをずず、ずず・・・と

すすって

周囲を見渡してる社長。

これは、何か話すネタを探してる挙動不審ともいえる行動だ。

一体今日は何の話？

あ〜なんなんだよ。

「りりこはん。あんた、なんか
夜ベンキョにいてるらしいやん、ベンキョ」

・・あ、またそんな話どっから仕入れたんだろ。
私、チラっとしゃべってしまったかな。

「ええ・・まあ・・」

「せやけどな〜
なかなかむつかしで。」

「そうなんですよ・・ちょっと実はくじけそうで・・」

「いや、そうやなしで。
今あるのんは過去の蓄積やさかいな」

はっ？

何？では、いくら勉強しても、もともとダメな私が無理、と
そうおっしゃりたい、と・・？

ちょっとムカっとしてきた。

人生にやり直しはきく？

「たとえばやな〜・・・
あんたが10年ほど前に戻って、
もいっぺん高校受験したい思うやろ。
今やったら、死に物狂いで一生懸命勉強して
もう1ランク上の高校に行けるのに、
とか思うやろ」
「あ〜思う、思う。
なんであの時もうちょっと勉強しなかったんやろう、っておもう」

社長はニヤリと笑った。
私もあまりの自分の心の底をついた言い方に
社長が私のことを「あんた」と呼んだことにさえ
軽くスルーしてしまった。

「それがやな〜あかんねん」
「何が！何があかんの！」
「もし、今14.5歳に戻ったところで
結局同じことや。やっぱり勉強せーへん」
「なんでよお〜するって。。
ていうか、今のこの脳みそ状態で
10年前に戻りたい！そうしたら少しはあの頃より
知識あるし一度勉強してるから復習みたいなかんじで
浪人氣分で有利かも！」
私はなんだか10年前に戻れるかのような気分になり、
うれしさに目がランランとしてきた。

「そ・れ・が・・・・！あかんねん。
いまの状態ですら15歳の輪の中にはいってみたい〜
こんなヒネた15歳おらんで」
「ヒネた・・・て・・・」
「それに、話題にもついていかれへん。」
「いや、だから・・・脳細胞だけよ・・・中身だけ」
「人間の本质、ゆうもんはそないかわらんもんやねん。
例えば、うちの嫁はんでもそうや。
今やったらちゃ〜んと子育てできるのに、なんてぬかしよる。
もう40年も前の子育てにまだ後悔あるみたいやな」

「子育てもやりなおしはきかへんの？」

もう大阪弁だだもれで、止まらない。

「そらそうや〜・・・」

実際うちとこなんか、

二人続けてでけて、

3人目は青天の霹靂や。

その時はそれでも『これで今度こそじっくり、ちゃんとした子育てできる』

ゆーとったんやで」

「それが・・・？」

「それが、まーたおんなじことや。

それどころか、3人目で6年もあいてでけたもんやから、

もう子育て忘れてるからまた一からや。

しかも、キチンと育てるところか、

かわいすぎて世間によくある

今度は甘やかしすぎで、

えらいことになってしもうたで。」

「じゃあ、どうすれば・・・？」

「結局、人生にやり直しはできん、ちゅーことやな。

ワシみたいに瞬間瞬間に魂込めて

生きる、ちゅーことや」



すくすく育て！一般ピープル

「じゃあ～私、一生バカなままじゃん?!」
私はせっかく新しい勉強をはじめて、
人生の巻き返しを図ろうとしてしている
意欲をそがれた。

「いや・・・勉強できる、でけなんは
また別の問題やねん。勉強でけるひとには
医者とか弁護士とかやなー、そないな職業についてもろて、
能力発揮してもろたらええだけのこっちゃ。

ワシら一般ピープルやわな～
ワシらにでける、与えられた道っちゅーのがあるわけや。
それを見つけるわけや」

一般ピープルって・・・
社長、時に英語使うんや。
しかも、確かに「ピーポー」と
発音した。

「まっ、ワシも中学2年までの英語はでけんねん。
せやけど単語がつながっていかんのやー
ハハ！」
と陽気に笑う一般ピーポーの構成員である社長。

「ま、確かに勉強でけなんで、
ほいでこんな地場産業のような会社たちあげて。。
まあ、アンタから見たら
仕事してんのかいな～て
思われてるやろけど、
肝心の仕事は3分でも、
それまでに至るプロセスっちゅーものに、
血肉を削ってきたからな。
この道を作るンがかなんねん。
せやけど、それさえ作っといたらあとは

エスカレーターにのっかってるようにスイスイやで。」

「はあ〜。。そんなもんですかね〜？」
私はたいして儲かってもなさそうな会社の社長の
説得力のなさにいまいち実感がわからない。

「せやけど、あれやで。
さぼってたらかかんねん。世の中はいごいてるさかいな。」
(注：いごいてる→動いてるの意)

「ワシかてスポーツ新聞ばかり読んでるんちゃうで。
たまにはプレジデントとかゆー雑誌も読んで
勉強しとんねん。
世の中のいごきをさっと読んで先見の妙で
行動する。これや！」

「はあ〜そうですか・・・」
「ほてからな・・・何事も基礎が大事やねん」

えっ・・・まだ続くんですか。

ちょっと疲れてきた。

社長、ちょっとコーシーいれましょ、コーシー。

せやな、りりこはん。
ええことゆうわ。



女に生まれて満足してる？

「お先に失礼しまあ～す」
今日も5時きっかりに会社を出る。

あ～今日はブタかばんだ。

月一の女の子の日なのに、これから深夜まで
たこ焼き屋のバイトなので
切らさないよう
ナプキンとかタンポンとか、
生理用品がたっぷり押し込まれている。

本当に女って面倒。

こうゆうとき、
オトコって楽だよな～・・・ておもう。

男の80%以上は
男に生まれたことに満足していて、
次に生まれ変わってもまた男！と
きっとおもってるだろうけど、
女の比率はもっと少ない。

現在女であることには
60%くらいは満足してるだろうけど、
それはきっと今の自分を否定したくないから。

生まれ変わってもまた女に生まれ変わりたい！って
人はきっと2割くらいだろう。
あとの7割は来世は男に！
あと1割は・・・ゲイかおかま希望。

女に生まれてよかったこと・・・て

……

いったいなんだろうな～

学生時代は

女子は先生から怒られにくい・・・

て、これメリット？

水泳の時間、嫌いだったらサボりやすい・・・

て、これメリット？

オトナになったら、レディースデーや

女性限定など

女性ならではの特典があったりして、

これはお得なのかな？と

おもうけど、

でも、だからといって

それを男からうらやましくは、思われない。

オトコってそうゆうイベントごとは

好きじゃないし、限定ものにも弱くないから

関係ねえよ。の世界。

じゃあ～なんなの。

女の特典・・・って。

女の悦び？

・・・って

私、本当にそれわかってんのかな？

まだなのかな？

それすらもわかんない・・・

「えらい、今日りりこはんのかばん、よう～

肥えてるやん」

社長が話しかけてきた。

うわ！一瞬びっくりした。

まさか、まさか・・・

生理用品つまってる。なんて
そこまで見抜かないよね？

「せやけど、えーバックもってんや。
たかかったやろ、そんなバック」

「社長、バックと発音してください、バックと」

「ほんま、ややこしな～

今の若いもんは・・・

バックやろ、バック！

昔からハンドバックゆーんや。

サンドバックにティーバック。

マリンちゃんはいてるんは、ティーバックや」

はあ？

マリンちゃん？

新種のグラドルですか？

「なにゆーてんねん。パチンコ業界のアイドル、
マリンちゃんやんけ～」

私は軽く会釈をして

そそくさと事務所をあとにした。



蓮が好き

電車に乗ってたこ焼きのバイトに
向かう途中、
浩輝からメールが届いた。

「今、何してる？」

とりあえず、即レス。

「今から、バイト」

危うくいつものクセで
ハートマークを入れるところだった。

やばいやばい。

誤解されるどころだった。

男ってハートマークで
すぐ誤解するイキモノだから。

「じゃあ食べに行くよ♡」
って、ハートマークが
入って返信が届いた。

だーかーらー・・・
いらないんだって、ハートマーク。
そして、来られたら困るんだって、たこ焼き屋。
でもまっ。
どこにお店あるか
教えてないし。。

「また今度ね」と
中途半端にメールしといた。
こんないい加減な

やさしさというか、
どっちつかずが
またややこしいことになるんだろっか。

しかし、
肝心の好きな男からはメールこず。

蓮ってあんまりメール好きじゃないんだよね～

私って
デコメとかキラキラ好きじゃない？

って、知らないよね。好きなんだよ。

でも、そうゆうキラキラメールとか、
動く絵文字とか
いっぱい入れて送ると
目がチカチカするとか
読みにくい、、とかいって
ウザがられる。

「ただでさえ、りりこのメールって
長文だからそれだけで読むの嫌になるんだよ」
って
嫌になるって
それ、メールが嫌なだけ？
私のことは嫌じゃないよね。

でも、そんな突っ込んだことを聞けない
惚れた弱み。

そんなに好きでもない男には強気に出れるんだけど、
蓮だけは絶対ダメ。
嫌われたくない、嫌われたくない、って
おもっちゃう。

あ～蓮の髪をかきあげるしぐさが好き。

鼻の頭を人差し指で
チョン！てつつかれる時が好き。

「こっち見ろよ」
って命令される時が好き。

あ～たこ焼き屋終わったら蓮のお店行こうかな。

ダメダメ、そんなことしたら嫌われちゃう。

でも、クラブの外で
出待ちとか・・・しちゃおっかな。
てか、
そうゆうのあんの？



強気、強気、強気な裏には

仕事が終わリ

蓮のお店まで行ってみたい衝動にかられた。

気がついたら

蓮の働いてるクラブ「パトーナ」の前まで

きてしまっていた。・・

ちょうどお店がはねて

蓮と一緒にお客さんと思われる

女性が気球についでるおもしろのように

ぶらさがりながらでてきた。

なあ～んてこと、

一昔前の

少女マンガみたいなこと。

このりりこさまにはないっ！！

明日も仕事の私。

まっすぐ帰るのだ！

駅までの道、

ずんずん歩いた。

帰りの電車の中。

また浩輝からメール。

「明日会える？」

だからダメなんだってば。

もう、無視。

ずんずん歩く。



家に着くころ電話が鳴る。

また浩輝。

しかたなく出る。

「あのさ・・・」

あ～ダメ！

浩輝の声聞いた瞬間、

はっきりわかった。

私はこの男が嫌いなんだってこと。

嫌いな男は声まで嫌いなんだってこと。

耳から腐ってきそうで、

おもわず電話を遠ざけた。

他の男からの電話で、

本当に好きな男がわかった。

「あのね、私浩輝のこと、

嫌いだ、って今わかった！」

思わず口走っていた。

えっ・・・？

腐ってきそうな浩輝の

聞いたことないトーンの声。

蓮に会いたいよ。

蓮に1回コールしてすぐ切った。

朝5時。

ケイタイの音で目が覚めた。

蓮だ。

飛び起きて電話に出る。

「・・・もしもし・・・りりこ？どうした？」

涙が出そうだった。

蓮だ。蓮の声。。

ずっと聞きたかった蓮の声。

たった2日なのに、もう何日も何週間も

声を聞いてない気がしてた。

蓮の声聞いているだけで

蓮に包まれてる気がする。

「今、仕事終わったんだ」

「そう・・・なんだ・・・」

よかった・・・やっぱり気球のおもしろみたい
いろいろな女にぶら下がられては、いなかった。

「今度、りりこに渡したいものあるんだ」

「えっ・・・何？」

もうすぐホワイトデーだから、お返しかな～

いつも、蓮は私が贈ったバレンタインの

20倍以上の金額の品物をお返ししてくれる。

「それは・・・会った時のお楽しみだよ」

蓮と話すだけで、

心にお花畑が広がってゆく。

私だけのお花畑。。

誰も摘み取らないでね。。

私のお花・・・

私は再び深い眠りに落ちていった。



お花畑の秘密・後篇

野原一面にひろがるれんげ畑。
れんげの蜜を吸って遊んでいた。



誰かがふわりと、れんげの
冠をかぶせてくれた。



しかし、無情にもふわりと舞い上がって風に運ばれた。

おいかける、おいかける、おいかける私。
走って走って走って走った。
走っても走っても追いつかない。
野原の行き止まりまで来てしまった。

そこは切り立った崖だった。

急直下の滝が流れている。
お腹の内臓をめぐりとられたような気がした
その時、
滝つぼにおっこちた。

気がついたら多国籍料理を食べていた。

私の大好きなアボカドが

たっぷり入った
サーモンいり生春巻き。

真っかなトムヤムクン。

温泉卵がのっかった
豚みそキムチ丼。

タコスがいっぱいのったお皿を
持ってきたのは沢口靖子。

「リッツじゃなくってごめんね」
なんていっている。

気がついたら
私はバケツをもって廊下に立たされていた。

中に入っているのは泥水。
しかしよく見ると
泥水と思っていたものは
コーヒーだった。

そこへティーバックを頭にかぶった
変なおじさんが
機関銃をもって入ってきて、
そこらじゅうを撃ち始めた。

私にもあたる！
死ぬ！殺される！！

れんげのれんは蓮の蓮？

7時20分！！

見なれた部屋の光景が
私を安心させた。

悪夢か・・・

いや、悪い夢ほどいいともいうから、
逆夢かも・・・？

れんげのれんは、蓮の蓮？

辞書で調べようか？

いや、ウィキペディアか、
ググって調べるか。またあとで。。

いつもの時間のいつもの電車に乗る。

窓から見える

一面のれんげ畑。

こんなところにあっただけ？

気がつかずに通り過ぎてた

いつもの風景が

いつもの風景でなくなってた。

れんげのれんは、蓮の蓮。

一人胸の中でつぶやく。

蓮を好きになってよかった。。



ヨースケの裏切り

駅を降りると左手に
焼き立てパンのお店がある
「今日はお昼にパン買っていこう」
そう思い立って、お店に寄った。

菜の花のイギリスパンサンドと、
スティックタイプのスープを買った。
期間限定、グリーンピースの春ポタージュだ。

それをマグカップに入れて飲もう。

私はウキウキした足取りだった。

■□■□■□■□■□

会社に着くと
社長が血相を変えてあたふたしていた。

「大変や！ヨースケがな。ヨースケが・・・」

「えっ？ヨースケがどうしたんですか？」

「ヨースケが昨日得意先から・・・
集金したカネ、そのまんまもって
とんずらしたんや。」

えっ・・・
そうだ。・・・昨日は夕方から集金に行っていた。
私の帰る時間には戻る時間ではなかったの
知らなかったが、
会社にもどらなかったんだ・・・

「昨日なかなかかえってけーへんから、
電話したらでーへんし、
今朝もでーへんし」

ヨースケは一人暮らしで
携帯しか持っていない。

「ほんまにな〜情だして
雇ってやってたらこんな恩知らずなことされるやろ〜」

しかも、イマドキ振込じゃなくて
現金払いのお店というのも
なかなか珍しいが、古い体質そのままなので
それはそれで仕方ない。。

しかし、社長の落ち込みようは尋常じゃない。
「金額はまあ、たかが
50万ほどやねん。ちいさいとこやさかいな。
いや、たいしたことない金額でもないけどな。
ワシがゆーてんのはヨースケの性根や」

私も
ヨースケはすっかり改心して、
生まれ変わったのかと
信じていたが、
やはり社長の信条でもある
「人間の本质ゆーもんは、そうなかなか変わらん」
とってたことが、
目の前に突き付けられた気がした。



インスタントコーヒーはまずい

「それで・・・
警察には連絡したんですか？」

おもむろに聞いてみる。

「いや、してへん。ちょっと迷てるんやどな、
せやけどまあ、する気ないわ。
これが1億や2億ゆうたら別やけどな。
まあ、50万やったらどうにかできるかな、ゆうのもあるし」

「いや～あまりいいかっこしないほうがいいですよ」

「まあ、正直ゆうてそれもあんねん。
裏切りやからな、裏切り。
この際バチーッと連絡してこらしめたる、みたいな
気いもするんやけどな。
せやけど、人は人を裏切るんやな・・・」

社長はいつになく肩を落とし、さみしそうだった。

人は人を裏切る・・・
私も誰かを裏切ることがあるのだろうか。
裏切ったことはあるだろうか。

蓮は・・・蓮は私を裏切るだろうか。
私は・・・蓮を裏切った。

つい最近の裏切り行為をはたと思いだした。

「ほんまにな～カネいるんやったら
正直に正面切ってそないゆうたら
なんぼでも都合したんのに。
いや、1億2億はあかんで。

1円おくとちゃうさかいな」

わかってますよ・・

それに、古すぎませんか？そのギャグ・・しかも
トミーズのパクリやし。。

「しかしなあ～・・人間ゆうもんが
変わるっちゅーのはそないむつかしもんやろか。
まあ、コーヒーも豆からひいたんが
いっちゃんおいしいわな。
インスタントコーヒーは、もむないさかいな。
人の心もインスタント的には短期間でかわらんねんやろ」

(注・もむない→まずい、の意。大阪弁の古い年より言葉)

わかるような

わからんような

含蓄あるようなないようなたとえだ。



ダイヤモンド

蓮からの
ホワイトデーの
お返しは
パインアメ30袋だった。

えっ・・・パインアメって・・・

思わず絶句したが

「りりこだって
バレンタイン、ブラックサンダーの大袋だったじゃん」

あっ・・・そうだった。

だって蓮、ブラックサンダー大好きなんだもん。
でも、なんていうバレンタインとホワイトデーのやりとり。

私はパインアメの穴に舌を突っ込んで遊んだ。
こうやって遊ぶのが昔から好き。

あ、でもさ～・・・
いつも、それプラスなにかくれるのに・・・？
私もネクタイ奮発したじゃん？

・・・て、別に私何かを要求してるんじゃないよ。。
パインアメで充分なんだけどさ・・・

ふと蓮が真剣なまなざしで
私を見つめた。

「りりこ・・・渡したいものがあるっていったろ」

「あ・・・うん・・・」

「めをつぶって・・・」

なんか少女漫画のヒロインじゃん、わたし。
ちょっと恥ずかしい・・・

そして・・・
左手の薬指に冷たい感触。

目をあけると。

ダイヤモンドだった。



「えーっ！！これ・・・これ・・・いいの？」

「リリこの誕生日のカラットなんだぜ」

えっ・・・そうなの・・・？

「リングの内側に彫られてるだろ」

私は思わずはずして確認した。

0.423

4月23日生まれの私。

0.423carat。

「いいの？こんな素敵なのもらって・・・」

「今、俺にできる精一杯だよ。」

俺の・・・夢についてきてほしいんだ」

新しい道

「ありがとう、蓮！こちらこそ・・・よろしくをお願いします」

思わず改まった口調になってしまった。

蓮が私の頭をクシャクシャに
なでてくれた。

そのまま蓮の胸に引き寄せられる。

蓮の鼓動が聞こえる。

蓮のにおいがする。

蓮の細い人差し指と中指が
私のあごにかかった。

蓮はキスするときはずっとそうする。

私が上を向くのど
蓮に上向きにされるのと
ほぼ同時だった。



°.*..°.*..°.*..°.*..°.*..°.*..°.*..°.*..°.*..°

「え～っ！

なんやて～結婚するってか？」

素っ頓狂な声で社長が頭の上から声を出した。

「ほんで、なにかいな・・・
ここもやめるんかいな。」

なにもやめることあらへんがな。
子供でけるまで続けたらえーがな」

「いや・・・それが・・・」

「え～なんやて。まさか専業主婦に
憧れてるなんていわへんやろうな。
ワシこう見えて
体は古いけど、
脳みそあたらしねん。
専業主婦みたいなん、な～んも
おもしろいことあらへんで。
うちの嫁はんも
子供生まれて
2年くらいかな。
専業しとったけど
半分ノイローゼみたいになって
ベランダから叫んどったで」

「はあ・・・」

「あ、何かいな。
もしかして、
子がでけたとか、そないなことないでな。なんぼなんでも。
黒木メイサやないねんから」

「よく知ってますね。そんな名前」

「あたり前田のクラッカーや。
いや～せやけど、
ヨースケもおれへんかったし、
ほんでりりこはんもか。
あと残るンはおじんばかりやんか」

社長のしゃべりの勢いは止まらない。

りりこの決断

「せやけど、昔うちの嫁はんが
若いころに、
キャリアウーマンたら
『翔んでる女』たらゆーコトバがではじめて・・・
いやそれでも、一部の人だけや。
実際言葉だけで、それほど華やかなことなんかあらへん」

・・・知らんし・・・翔んでる女なんか・・・

「男女雇用均等法、なんちゆーもんが
でけても、あくまで一部の大企業だけや。
実際は育児休暇どころか、
産休かてとりにくい」

・・・蓮からもらったダイヤモンド

「せやけど、それでもそんなケモノ道を
かきわけかきわけ進んでいってくれたひとが
おったからこそやなー。道がひらけてきたわけや」

・・・私の夢ってなんだろう。

「ほんでもなにやな。これだけ時代が変化したように
おもても、今の女子高校生の将来なりたいモンゆーたら
専業主婦やちゅーらしいやん」

・・・蓮の夢を私も一緒につくっていく。

「せや。そーいえば、りりこはん。
なんやベンキョ通とったんちゃうん？
あれ、どないしたん？あれもやめるんかー？」

・ ・ 蓮の夢は私の夢。

「ナンギやな～自分の夢、男のために
あきらめんのかいなー」

・ ・ 私の幸せはどこにある？

「まあーせやけど、結婚して子ども産んでー
・ ・ それも幸せのひとつやけどな。
子どもはかわいいで～
育てるんは大変やけどな。
まあ～そんな子どもを捨てる、ゆー親もおるんやさかい・・・」

・ ・ ・ 捨てられた ・ ・ 蓮 ・ ・

「社長！！
私、夏のボーナスもらったら ・ ・ ここの会社やめます！！」

「なんやて、りりこはん。えらいしっかりしとるな～
ボーナスもろてから、やめるてな一。
そらー結婚祝いも兼ねて、
ドーン！とぎょーさんはずんだるわ。
1億や2億は無理やで。
1円おくんちゃうで」

昨日会ったばかりなのに
もう蓮に会いたい！
早く会いたい！
会いたい蓮に！



ベッドトーク

「蓮ってさ。。
こんなこと聞いていいかわかんないけど・・・
小さいころ、
いろいろ辛い思いしたんだよね」

「辛い思いなんてゆうのは
誰でもしてるんじゃないの。
家族がいてもいなくてもね」

「ね一家族ってさ。。

家族でいるだけじゃ一家族じゃないよね。」

一つの部屋で過ごしてても
部屋の端から端にツーと
流れる冷たい空気。

そういうものを感じ取ってしまったから、
私は家を出たの」

「・・・」

蓮は黙って聞いている。

「ねえ・・・蓮・・・
私はさ。。
蓮のことすっごい好きで、好きで好きで・・・

そして蓮もこんな私のことすっごい好きでいてくれてうれしいんだけど」

「こんな私っていうなよ」

蓮がにらんだ。

「そんな言葉、りりこを好きな俺に対して失礼だろ」

「あ。。ごめん。。」

私は

蓮の裸の胸に右のほっぺをくっつけた。

左手で蓮の脇腹をなでながら、

「私はこうやって蓮と一緒にいれて
すごい幸せでうれしいんだけど、
でも、それで・・・それだけで・・・いいのかな・・・て・・・」

蓮の指先が私の髪の毛をもてあそぶ。

「私は蓮のことが好きだっていう気持ちが
とめられなくて、どんどん
それをおしつけていってるけど、
それで・・・それが幸せだけど、
でも蓮は幸せ？」

「俺は・・・りりこと一緒にいられれば
幸せなんだよ。
りりこのまっすぐなところ、
嘘がつけないところ。
すぐにばれるところ。
そうゆうところも好きだよ」

「他には・・・？」

「あとは・・・なんといっても。
この

カ・・ラ・・ダ・・」

「なあ～んだ・・
やっぱりカラダかあ～
オトコってやっぱり体なんだあ～」

私はおどけて
蓮の足もとまでもぐって行って
「おしおきにすね毛ぬいてやる！！」

と叫んだ。

イテッ！！

猫の毛のような蓮のすね毛が2本。
「ほらっ・・」
たんぽぽの綿毛のようにそれを飛ばした。

私たちは再び深く愛し合った。



蓮の独白

俺さ・・

幼いころ、弟と一緒に園にいた。

一度だけ・・おやじが・・いや、

おやじという人がきてさ・・

俺たち二人を遊園地に連れて行ってくれた。

そんなところに

いったこともなくて、

楽しくて楽しくて・・

でも、夕方また園に置いていかれた。

おやじの背中見ながら、

いつまでもいつまでも弟と二人、

ワンワン泣いて、

園長先生困らせて、

泣いて泣いて・・泣き疲れて寝た。

中途半端なその場しのぎの優しさなんて

本物の愛じゃない。

愛ってそんな生やさしいもんじゃない。

蓮の瞳は

どこか遠くを見てるようだった。

私を見てるようで見ていなかった。

私の瞳を見つめる蓮。

でもその蓮の瞳は

私を突き抜け、

もっともっと遠い何か・・

はるかかなたに

光り輝くものを
探しているようだった。

あれはきっと・・・



好きになることは簡単。好きでい続けることは難しい

「ねー私と蓮で
あったかい幸せな家庭つくっていこうよ。」
私はつとめて明るくふるまった。
「そんな、高校生みたいな夢物語、本気でおもってんのか」
「えっ・・・」
「結婚するときはみんな甘いことばかりいってんだよ」
・・・どうしたんだろ、・・・蓮・・・
「だれも結婚するときに
離婚するかもしれない、不幸になるかもしれない。
なんて考えない」

「・・・」
「子どもが産まれたら虐待しよう、
産んだら赤ちゃんポストにいれにいこう、と
最初から考えてる人はいないだろ」
「・・・」
「いつまでたっても、
施設の需要はなくなるし、
そこでも、18歳になった子を
どうするかの問題もずっと抱えたまま」
「だから・・・だから、
二人で理想のおうち、作る！
一緒に作ろうよ、ハッピーウィングって
名前まで考えてたじゃん、蓮。
庭にオリーブの木を植えて
私はそこで収穫して・・・」

「りりこ・・・今まで何人のオトコと
つきあってきた？」
さえぎるように蓮が聞いてきた。
「え・・・何よ。唐突に・・・」

「いや・・・別に何人とつきあってきたっていいんだ。
俺もいろんな女とつきあってきたから」
「蓮は女泣かせだからね～」
「真面目に聞けよ。」

その一人ひとりと

真剣にむきあってきたか、っていうこと」

「うん・・・多分・・・。」

「多分？」

「あ、でも本当～に真剣に好きになったのは蓮がはじめて」

「じゃあ、今まではコンセント・セックスだったわけだ」

「なに・・・コンセント・セック・・・って・・・」

「りりこ・・・俺のことをず～っと好きでいられる、って
約束できるか？」

蓮は私の瞳をまっすぐ見つめてそういった。

「でき・・・る・・・できる」



好きになることはかんたん。

でも、好きでいつづけることは難しい。

バンドエイドの効用

じゃあ・・・今日は帰るよ・・・

私はなんだかちょっと
もの悲しい気分になりながら

それでもいつものように
ブラジャーのホックを蓮にとめてもらった。

どうして
悲しい気持ちになるのかよくわからなかった。

蓮が最後に後ろから手をまわして
そっと抱いて
キスしてくれても
悲しい気持ちは消えなかった。

二人でいてもさみしいんだよね・・・
どうして・・・

こんなに近くても遠くに感じるのはなぜ。

家に帰ってよく考えてみようとおもった。



翌日出勤したら
頭蓋骨に響くような

社長のテンションの高さに閉口した。

「おはよーさん。りりこちゃん。
なんや、今日はなんか元気ないんとちゃうん？」

「別になんでもありませんよ・・・」

「そうかあ〜？」
探るように
老眼鏡をずらしながら下から目線で
私を見る。

うわ・・・！その顔私、生理的にダメなんですう〜・・・
ネズミおやじが
メガネかけたみたいにしか見えない。

「ま、だいじなことはやな。
傷をひろげんことや。
日本人ゆーのは、とくに
我慢する体質やからな。
よう外でこけたときに、
赤チンぬるやろ。」
「赤チン？なんですか、それ」
「しらんのかいな。ほたら、どないしとったんや」
「マキロンで消毒してキズドライふりかけたり、
なければバンドエイド貼ったり」
「バンドエイドって
ばんそうこのことやろ。あかんあかん、そんなもん。
傷ゆうもんは
風にふかさなあかんねん。
風通しよくして、
空気にふれたらなおってくんねん。」
「でも、バンドエイドって

フツーに貼りますよ、誰でも」

「臭いものにはふたをしろ、
せやけど生キズにふたして
ほっといたら中で腐ってくるで〜。」

何が言いたいのか、社長。

お花見デート

日曜だけは
昼間にデートできる
唯一の時・・・

今日は蓮とお花見デート。

お花見の季節って
結局寒いんだよね～・・・

毎年毎年この季節に
着るものって悩む。。

とりあえず、
花粉よけ機能があるという
スプリングコート着たけど、
でもマフラーぐるぐるとか、
もうできないし
ましてや手袋なんてできない。

「蓮、あそこにおでん売ってるよ、食べよう」

地獄のかまど鍋みたいところに
大量のおでんが
ぐつぐつ煮込まれている。



「1個100円だって、
全種類食べよう」

私は全種といっても5種類のおでんだねを
2さら注文した。

そしてあいてるベンチに腰掛けて
二人でフーフー言いながら
おでんを食べた。

「でも、蓮っておでんとか
桜とか似合わないね」

「そうか？実は俺様、
背中に桜吹雪しょってるんだぜ」

「えっ。そうなの～」

こうやって
無邪気に笑って遊んでるときは楽しいんだけど。
でも、私の心の中には
墨汁ポトッと
落としたような
一点のシミが
残っていて、なかなか消えない。

こうやって
そうゆうのも
なかったようなふりして
見過ごして
穏やかに楽しく
過ごしていけば
それはそれで・・・
楽しく生きていけるかもしれない・・・

でも、私にはやっぱりそれはできなかった。

「蓮・・蓮って
自分のこと好き？」

ついに私は聞いてしまった。

帰りの車の中。

蓮の返事はなかった。

自分自身のこと好き？

「蓮・・・自分で自分のこと・・・好き？」

信号が赤になった。

蓮は何も言わず、じっと前を見ている。

「自分で自分のこと好きじゃなかったら、
誰が自分のこと好きなの？
自分のこと好きでない人間が
他の誰かから好かれるわけないよ。」

車は高速に入って行った。

「私は、蓮のこと好きだよ。」

世界中で一番好き。

世界中の誰よりも。

もし、世界中の人間が蓮のこと嫌ったとしても私だけは好き。

もし・・・もし・・・蓮が
世界中の人間から
後ろ指さされるようなことがあったとしても・・・
私はどこまでいっても、
絶対蓮の味方。」

私は息を大きく吸い込んだ。

「私以上に蓮のこと好きな人は
もう絶対現れないよ！！」

涙声になっていた。

蓮はチラと私を見て
また視線を戻した。

「同情はいらないんだよ」

窓を開けてタバコに火をつけ始める蓮。

「同情なんかじゃない！」

「俺・・・自分のこと好きじゃないかもな。
自分の過去を消したくて消したくて・・・
でも、そうやってるうちに
自分自身のことを消してしまいたくなってくるときがあったよ。
でも、こんな俺でもりりこのことは好きだよ」

「こんな・・・ていうなよ。
蓮のこと好きな私に失礼だろ」

私は蓮のほっぺをつつついてやった。

でも・・・
蓮の瞳はまた
遠くを見ていた。

私の知らない蓮の瞳の眼の光。



ホストクラブ初体験

突然、蓮と連絡が取れなくなった。

メールしても返事はないし、
通話もつながらない。

「もしかして・・・自殺？」

突拍子もないことが湧きあがってきた。

蓮のマンションに行ってみた。

「きちゃった女はしたくなかったんだけどな・・・」

でも、今はそんなこと言ってる場合じゃない。

蓮の部屋の暗証番号押す。

何の反応もない。

こうゆうとき、
いまどきのマンションって都合悪いよな～・・・

蓮の車・・・ない・・・

あ～どうするか・・・

今からでも

蓮のお店に行ってみるか？。

きちゃダメだって
言われてたけど・・・

クラブ・パトナー。

入り口に立つだけで
ドキドキする。

そお〜っと
そお〜っと・・・

ドアをあける。

なんだかビクビクする。

ホストクラブ初体験！！



いらっしゃいませ。

にこにこした笑顔で
出迎えてくれる。

「あ、あの・・・」

ホストくんの
小首をかしげてこちらを見ている

しぐさが

子犬みたいで可愛い。
まだ新人さんだろうか。

「あの・・蓮は・・
蓮いますか・・？」

「蓮さん？あ、ジョニー？」

ジョニーって。。

誰？

あーきっと蓮のこと？

いわゆる源氏名とかいうやつ？

「ちょっと待ってくださいね」

あ～こんなところで

蓮って働いてたんだ。。

物珍しげにキョロキョロしてしまう私。

「今日は休みだけど。。」

休み・・休みか・・

休みなら。。いいんだけど・・

「何か・・伝えておきましょうか？」

「いえ・・別に・・大丈夫です」

って、全然大丈夫じゃなかった。

「なんやねん～りりこはん。

オトコにふられたんかいな～」

頭に響く社長の声。

「違いますよ！！」

必死で否定する私。

「結婚するとまでゆーとったんのはな～

オトコのほうが
マリッジブルーになっとんちゃうか」

「マリッジブルー？」

「せや、いまどきの草食系とかいう
男子はそうゆうことになる場合があるっちゅー話や。

りりこはんは肉食系やろ。
せやからそんなことで悩まんねん。
突き進むタイプやさかいな。

ちなみにワシは中華が好きやけどな」

そんな、マリッジブルーとか
単純なものだったらいいけど。

いや、簡単なものではないのかな。
深刻なんだろうか。

蓮の母親

「蓮・・・きてくれたんだね・・・」

なつかしそうな目で
園長先生が蓮を見つめていた。

蓮はお世話になった
施設の園長先生に会いに来ていた。

「元気だった？」
軽く蓮の細い腕をなで、
見上げながら
そう聞いた。

「ん・・・先生も・・・元気だった？」

「うん。。
もうトシだからね・・・
いろいろ病気したり大変だった時期もあったけどね。」

子どもたちが物珍しいものでも見るように
蓮を取り囲んでいた。

「わー！！このお兄ちゃんの時計、
金だ、金！！」

一人の男の子が叫んだ。

「これ、おもちゃだよ。」
笑いながら蓮がそういった。

少しあいた窓からは
優しい風が吹いてきた。

「蓮・・・あなたにずっと・・・話そうかどうしようか
迷ってたんだけど・・・」

園長先生が
マグカップのお茶を一口飲んで
おもむろに口を開いた。

「あなたの・・・
お母さんだという人がきてね・・・」

蓮は息をのんだ。

「その方は、体を悪くして入院することになったとって。
もし、万が一のことがあったら
最後にあなたと弟のユージに会いたいとって・・・」

蓮はテーブルを見つめた。

「会うかどうかはあなたの判断にまかせます。
お母さんにも蓮に伝えることができるかどうかは
わかりませんと伝えてあるの。
ただ・・・私たちも
本当にその方が蓮の母親かどうなのか・・・
わからなかったんだけど・・・」

とって
園長先生は
たちあがって
部屋の片隅にあるレターボックスをあけた。

中から取り出したのは
2冊の母子手帳。

「お母さん、これを大事にもってらしてね。
これが・・・私と子どもたちをつなぐ証だからとって。
この手帳を見たら
私が母親だということがわかってもらえるって・・・」

テーブルに置かれた
すりきれた
母子手帳。

蓮は触れることができなかった。



夢に向かって

「蓮・・・どこ行ってたの？3日間も・・・」

やっと蓮と電話がつながった。

「あ～不動産の方たちと打ち合わせとかあって。。

いろいろ忙しかったんだ」

「そう・・・なんだ・・・」

ちょっと不審な気配もするけど、あまりつっこまずにいよう。

私もお店に勝手に行ってしまったのは
内緒にしてもらってるし。

「あ～今度買った土地の地鎮祭があるんだ。」

「ジ・・・チンサイ？なに、それ？」

「よくやってるだろ。

新しく家とか建物建てるときに
滞りなく

無事工事がすすみますように、と
神主さんなんかにきてもらうの」

「あ～お祓いみたいなの。

えっ、そうゆうのするの、蓮。

結構古風なんだね」

「そうだよ、ちゃんとしないと気が済まないよ。

それに、すごく業者の方にもすすめられるしね。

あ、今度一緒にその土地見に行く？」

「あ、うん！見に行く」

いよいよ土地なんか買ったんだ～・・・

夢に近づいてきたね。。

私までワクワクしてきた。



広大な土地だった。
ちょっと田舎だけど、
ゆっくりゆったり
子どもたちに過ごしてもらえそう・・・

「ここに・・・入口・・・
玄関はこっち向き・・・」
私はおままごとみたいに
線をひいて
夢を描いた。

「りりこ・・・あのさ・・・」
蓮が突然低い声ではなしかけてきた。
「ん？」

風が吹いてきて髪の毛がバサバサ流れていく。

「俺の・・・母親だっていう人に会おうと思うんだけど・・・」
「えっ・・・いたの・・・」
「りりこも・・・一緒に会うか？」

えっ・・・私も・・・
そうゆうの、ってどうなんだろ。
どうしよう。。

最期のサンセット

「やっぱり・・・ここで待ってるよ・・・」

病院の入口まで来たが、
中に入る勇気はなく外で待っていることを蓮に告げる。

「そっか・・・」

蓮は一人で
中に入っていった。

庭には桜が咲いていた。
もう散り始めで
風に吹かれてたくさんの花びらが
地面をびっしり埋め尽くしていた。

一步一步踏みしめるように歩く。

花びらの一枚がほっぺに張り付いた。
「やっぱりお母さんに会おう！」
そう思った。

あわてて蓮をおっかける。

受付で病室を聞いて、
部屋を探す。

・・・ここか・・・
軽くノックをしてそーっとドアをあける。

蓮の背中とお母さんらしき人の姿が見えた。
・・・あ、やっぱり、はいつていけない・・・

またドアを閉めて
外で待つ。

しばらくして、
年配の女性が中から出てきて、
チラと私を見ていった。

■□■□■□■□■□

「蓮・・・蓮なんだね・・・」
母と思われるその女性は枯れ木のようにであった。

「これ・・・」蓮の差し出した
母子手帳を震える手で受け取る母。
その手も血管が浮き出て、
ただ骨と皮だけの手になっていた。
腕にはいくつもの
注射や点滴の跡。

蓮は凝視することが出来ないでいた。

「ごめんね・・・
きてくれて・・・ありがとう・・・」
女性の目から大粒の涙が落ち、
布団を濡らした。

「結婚・・・したい人がいて・・・
その子を今日・・・つれてきてるんだけど・・・」

「そう・・・なの・・・会いたかった・・・
でも会う資格なんかないね。。
蓮に会えただけでもう充分。」

「また・・・くるよ・・・」

今度はその子も・・・多分
入ってくるとおもうから・・・」

「ん・・・でも、もう私長くないと思うから・・・」

最後まで蓮は
「お母さん」と
呼ぶことはできなかった。
母も自分のことは
「私」で通した。

「お母さん」と呼ぶべきだったのか。

病室を出た蓮は
廊下がゆがんで見えた。

ゆがんだ先に
りんかくのぼやけた
りりこがいた。



新しい生活

夏の暑い日。

私と蓮のハッピーウィングが完成した。

幸せの翼ーハッピーウィング。

ここからたくさんの幸せが羽ばたいて
いってくれたらいいな。

私は庭にちょっとした
畑を耕した。

秋になったら苗を植えて育てよう。

ミニトマトやキュウリやナスなんかがいいかな。
私がこんなことに
興味もつなんて
自分で自分にびっくり。

夏の終わりのある日。
健太がうちにやってきた。

3歳の男の子。

毎日一緒に過ごした。
朝ごはんも昼ごはんも一緒に作って食べた。

絵本の読み聞かせだってした。
一日3回公演。
午前中に1回。
お昼寝前に1回。
寝る前に1回。

こんなことを私がするなんて。
自分で自分にびっくり。

蓮はハッピーウィングが
軌道に乗るまでは
アルバイトをかけもちすることにした。

手始めに宅配ピザのバイトをはじめた。

イケメン兄ちゃんがデリバリーしてくれると
噂が広がって、
好評のようだ。
私も蓮に宅配してもらいたくって
わざわざ電話したら
あとで蓮から
こっぴどく叱られた。

そんな今までとは
打って変わった
新しい世界の新鮮な生活。
ひとつひとつ手作りの
大地を踏みしめて生きてるような感覚。

人間って
どんな環境でもそれなりになじんで
生きていけるんだな〜と
実感していた。

夏が終わり、
秋に差し掛かろうろしていたある日。



蓮のお母さんが亡くなったという
知らせが届いた。

すべてをあなたに

蓮のお母さんが死んだ・・・蓮の・・・

蓮の背中が震えていた。
私は近づけなかった。

蓮の背中が小刻みに揺れ始めた。
私はガラス細工に触れるように、
そっと蓮の背中に手をかけた。

蓮の背中って・・・
こんなに華奢（きゃしゃ）だったっけ・・・

蓮の瞳は
蒼く、深く、
底がない湖のようだった。

その湖の底から、あふれてきたものが
おさえきれず
一筋の流れとなって落ち、床を濡らした。

蓮・・・
私はそっと
そのしずくを人差し指でぬぐった。

蓮・・・ひとりじゃないよ・・・

私がいるから・・・

蓮は私の頭を抱いて引き寄せた。

蓮は号泣した。
初めて見た蓮の涙。
はじめて蓮が私に感情をさらけだし、
すべてをぶつけてきた。

蓮の瞳は
私をまっすぐ見つめていた。

私の瞳の奥の奥をしっかりと見据えていた。
でももう、
瞳の奥にあるもっと遠いどこかを見ているのではなく、
私だけを見つめていた。

「俺の、居場所が見つかった。」

その夜、私の体の奥に
新しいのちが生まれた。



やぶこのひとりごと：

最後までお読みいただきまして

ありがとうございました。

これで私も蓮とお別れなんて
後ろ髪ひかれる思いで
さみしすぎるけど、

これからは草葉の陰から（？）
そっと蓮と、
りりこの幸せを見守っていきたいと思います。

次回からは
ガラッと
変わらして
小学生の女の子を主人公にした
お話をかきたいと思っております。
どうぞ、よろしく。

あなたと私の極道物語

<http://p.booklog.jp/book/48412>

著者：キャンディやぶこ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/pinky77/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/48412>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/48412>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.